

編集室

* 今月号は「超臨場感コミュニケーションの近未来像」と題して、高度なメディア処理によるコミュニケーション技術の現状と方向性に関する特集をお送りした。本会誌の特集は年2回企画されており、小特集と異なり誌面全体を一つのテーマでカバーする。読者の興味を最大限に引き出すために、編集作業には時間と労力を通常以上にかけることとなるが、昨今脚光を浴びている技術分野や話題などを取り上げ、十分に深掘りして紹介できる誌面ともなるので、編集チームとしては本領を發揮できる機会ともなる。

* また、通常号の表紙デザインと異なり、特集のテーマに合わせて表紙をデザインすることができる。今回はデザイナーの内田華代さんに、トンボの視覚やレーダなどのイメージの具象化によって、超臨場感をもたらす映像、音などのイメージを想定した鮮やかで美しいデザインをして頂いた。超臨場感そのものは、表紙のような旧来のメディアでは表現できない。したがって、メディアの先進的なイメージのデザインを優先した次第であるが、どのような印象を持たれただろうか。

* さて、先日のことになるが、工学者だけでなく広い分野の人を対象にして、超臨場感にかかわる講演を行う機会があった。その質疑応答での議論が、非常に面白かった。超臨場感を実現することは本当にすべての人に優しいことなのだろうか、という疑問から、ひょっとすると人間の機能を超え、神をも恐れぬ不敬の振る舞いなのではないか、という議論も出てきた。超臨場感は、様々な人を刺激し、いろいろな想像を沸き立たせ、議論を巻き起こすテーマである。超臨場感コミュニケーションは、まずは特定の人を対象に、その知覚、認知能力を補うべきものでよいと思う。しかし本来、向かうところは、原島先生が書かれているように、文化を創造し、その結果すべての人を幸せにすべき技術であると感じる。情報・システムにかかわる技術者として、この分野の研究開発のますますの進展に期待したい。

(編集特別幹事 荒川賢一)

* 1日発行の本誌がお手元に届くのは連休明けであろうが、特に教育機関では、新年度の忙しさも一段落し、夏に向けて教育・研究に精力的に取り組む時期である。

* 報道で見聞きされた会員も多いと思うが、平成23年4月の施行を予定して、大学設置基準の改正が公布された。その中で、本会の分野に関連があるのは、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」の記述である。

* 本会に関連する学部学科では電子情報通信に関する高度人材の輩出を掲げ、それを満たすカリキュラムを設計しているのが一般的であるから、今回の改正内容に驚きは少ないかもしれない。言わずもがなであるが、EngineeringやScienceに携わる専門職には知識や経験を統合し、様々な課題に対応することが求められている。このため、本人が卒業後に自主的・継続的に能力を向上できる資質を有しなければならない。

* 本誌では最近「学力評価の最前線」小特集を実施した。電子情報通信分野の研究動向・技術革新・社会状況だけでなく、技術者継続教育などの広い意味での教育動向についても本誌は積極的に紹介すべきと考えるが、読者である会員の皆様はどうお考えだろうか。

(編集特別幹事 牧野光則)